



地域の手で持続可能な未来を選択しよう



風見正三氏(埼玉県在住)
宮城大学事業構想学部教授

未曾有の災害をもたらした東日本大震災を経て、日本の社会は復興に向け新しい社会を構築する必要に迫られています。この先にどのような未来を紡ぎだすか、わたしたちもその選択に責任を持っています。埼玉ワーカーズフォーラムで基調講演をいただいた風見先生に、これから期待される社会のあり方について寄稿していただきました。

20世紀的な文明観を越えて

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、現在、日本は国家的な危機に直面している。大震災により、数多くの貴重な命が失われ、都市のライフラインは失われた。さらに、大震災によって生じた原発事故により、東北のみならず全国の住民が原発事故の動向に不安な日々をおくっている。このような甚大な被害を生み出した大震災と原発事故を乗り越えていくために、今こそ、これまでの都市や産業の在り方、エネルギーやライフスタイルを転換し、持続可能な未来に向けた改革の道を歩まなくてはならない。

20世紀は、「都市の時代」といわれている。都市というシステムが科学技術に支えられながら巨大化し、経済優先の都市づくりがなされてきたことの弊害は大きい。科学技術の発展や経済活動の拡大が社会を豊かにするという過信が様々な災害を生み出してきている。21世紀は、これまでの効率性重視、経済性重視、科学技術過信を超えて、自然の知恵を学び、経済的

価値だけでは表せない、文化的な豊かさ、スローな生活習慣、オルタナティブな技術を重視しながら、支え合いによる経済社会を再構築していかなければならない。

地域主体の 持続可能な食とエネルギーの選択

持続可能な社会を構築していくための重要な鍵となるものは、「地域主体」、「生命主義」に基づく「安全で安心な食とエネルギーの確保」である。本来、水や食糧、エネルギーはローカルな資源によって賄われてきた。しかし、農業の大規模化や都市の集中化によって、生産地と消費地が遠くなり、生産者と消費者も見えない関係となってきた。さらには、農産物のグローバル化により、食糧の自給率は低下し、食の安全性や安定性は急速に失われてきたのである。

エネルギーについても、我々は、自らのライフスタイルがエネルギー政策や原子力発電に深く関係していることを知らなければならない。大都市の電力需要を賄うために大規模な発電

施設が地方に増設されてきたことを認識する必要がある。そして、こうした電力やエネルギー供給の在り方について、立地する地域を含めた国民全体の社会的な合意形成が十分になされてきたのかということについて再考していく必要がある。地域が十分な科学的知識と合意形成の上で、地域の適切なエネルギーを主体的に選択する仕組みが必要となっている。もちろん、すべてのエネルギーを地域内で生産するという事は難しい。しかし、地域に必要なエネルギーを地域の責任において選択することになれば、自らの安全を差し出して、リスクの高いエネルギーを選択することはしないだろう。これからのエネルギーは、地域の主体的な選択によって供給されるべきである。

食についても同様である。地域の食糧をできる限り、その地域で生産、消費していく関係を構築することができれば、生産者と消費者の中には、透明な信頼関係が生まれ、地域の人々が主体的に農業を支える社会が構築される。もちろん、これは、地域内で食料を自給自足することを意味するものではなく、地域の自給率を高めた上で、その地域で生産可能な余剰の食糧を地域外との補完関係によって、地域外に提供し、支え合うことを意味している。生活クラブ生協やワーカーズコレクティブの理念や取り組みは、まさに、こうした「地域主体の食やエネルギー選択」への具体的なビジョンを提示しており、地域の主体的な選択による「生産と消費の提携」や「地域に密着した産業や働き方の創造」によって、持続可能な未来を実現する具体的な道を示唆しているといえよう。

このように、地域主体で、食やエネルギーの生産と消費を行うことは、食やエネルギーを生産することへの敬意や理解を深めるとともに、太陽光、風力、水力、地熱、バイオマスといった地域特性を活かしたクリーンで安全なエネルギーを主体的に選択し、経済性やリスクを認識した

持続可能なライフスタイルを獲得することにつながるのである。

地域の手で新しい未来の選択を

「持続可能な未来」とは、こうした地域の自然資源、社会インフラ、制度資本を「社会的共通資本(Social Common Capital)」として再認識し、それらを地域の主体的な管理運営によって次世代に継承していく仕組みによって実現していくものである。今回の大震災や原発事故は、自らの健康、安全な水や食糧、清らかな空気や大地を守るためには、国民自らが、都市計画、国土計画、環境計画、エネルギーといった政策的な分野に対しても主体的に関与していくことが重要であることを示唆した。

今こそ、国民一人ひとりが自らのライフスタイルを見直し、これまでの大量生産、大量消費、大量廃棄のライフスタイルを脱却し、食やエネルギーに対して主体的な意思表示をしていくことが重要となる。そして、国や自治体も、これまでの成長を追い求める国土政策や都市政策を転換し、21世紀にふさわしい持続可能な社会を実現していくことに本格的に進まなくてはならない。この大震災と原発事故を乗り越えて、多くの人々が新しい一歩を踏み出し、真の豊かさを手に入れることができる持続可能な社会を実現するために、今こそ、地域の手で新しい未来を選択していくことが求められる。

参考文献

- 1) 宇沢弘文(2011)『特別寄稿 菅政権の目指すものと、その背景』農業協同組合新聞社
- 2) 風見正三、他(2009)『コミュニティビジネス入門 地域市民の社会的事業』学芸出版社



船を共同で使う方式で天然ワカメを採る漁業者。力がみなぎる

協同での働き方も持続可能な社会構築の鍵

漁船の共同運営で漁を再開した ^{おもえ}重茂漁業協同組合

岩手県重茂地区では、震災前814隻あった漁協所属船が津波で14隻まで減った。これまでに中古船を購入したほか、使えそうな船を回収して修理、新規発注もして約200隻を確保するめどが立った。

漁船はいったん漁協に集約後、地域ごとに割り当てる。収穫作業などの仕事を分け合い、利益も分配する。

(記事の内容 2011/05/22 岩手日報)

東日本大震災！ ワーカーズ・コレクティブの仲間たちは？

あの日以降もワーカーズらしい誠意で事業を続ける仲間たちがいます。

ランチを提供し続ける決意 キッチン味噌



生活クラブ生協飯能デリバリーセンター内の食堂経営が「キッチン味噌」の事業です。

震災では、乾燥させるために重ねておいたトレーが数枚床に落ちて割れた程度の被害で済みました。

14日(月)、利用者から「食堂やっているね」というほっとした声が聞かれました。そして次の日から利用の様子が普段と違いました。定食の注文が急に増え、カレーを売る場所には行列ができました。「ご飯がないよ」のメンバーの声。地元のスーパーでは早朝から行列で、お米やパン等が品薄状態だったのです。「ご飯を売ってほしい」「お米を売ってほしい」というお客さんも。こんな時こそ昼食を提供し続けなければと思い、炊飯量を増やして対応しましたが、食品庫のお米がアツという間に少なくなりました。

4月のお米の配達まで持ちこたえる事が出来るのだろうかと不安でしたが、この傾向は4月初旬まで続きました。

食を提供する事業がいざという時には大きな安心も提供できることを知りました。

キッチン味噌 廣地直子

地域の「てとて」をつなげた実感 てとて

「てとて」の事業の一つは、『みんなの居場所「わ～くわっく北本」』の運営(地域サロン、一時託児・親子のひろば、ランチの提供)です。二つ目が家事支援・生活サポートです。

震災当日、幸いなことに「わ～くわっく北本」では被害はありませんでした。そこで揺れが収まるとすぐに手分けしてご利用者の安否を確認しました。安否確認で訪問した際には停電に備えた準備のお手伝いなどもし、生活サポートを利用されているお宅では、ご家族が帰宅されるまでの見守りなどを行いました。地震の後、停電などで「わ～くわっく北本」の居場所事業は一週間休業しましたが、ランチ提供は続けていました。「家にいるのが不安」と休業中でも毎日通って来られる方がありました。

依頼はなかったけれど安否確認の訪問をしたり、休業中でも居場所として利用してもらったり、私たちの日々の関わりがいざというときの安心を支える地域の力となっていると実感できました。

てとて 仲谷まり



『みんなの居場所「わ～くわっく北本」』のランチタイム

震災炊き出しボランティアに！ 雪花菜くらぶ



鴻巣市でお弁当作りのワーカーズとなったばかりの「雪花菜くらぶ」が、この大災害に何かしたいと思い、岩手県大槌町に400人分の炊き出しボランティアに行きました。

栄養バランスの良い、暖かい食事を食べていただきたいと皆で知恵を出し合い、3日前から下ごしらえの準備をすすめました。メニューは

メンチカツ、煮物、根菜のおつゆ、サラダや漬物など、すべて手づくりです。業務用ガスコンロを4台持参しメンチカツを揚げ直し、できる限りの心を込めました。食事の喜びを感じていただくことができた実感しています。

知り合いに声をかけ、道具や食材の調達から、現地で作業するスタッフまでたくさんの方の協力を得ました。今まで3回出かけましたが今後も続けます。

雪花菜(おから)くらぶ 岩沢はる

「てとて」の皆さんは、被災地に軽自動車を届けたそうです。「てとて」HPに載っています。埼玉ワーカーズ連合会のHPからリンクできますよ。編集部



日本の森よ よみがえれ！

首都圏のワーカーズが国産間伐材の割りばしを開発 1膳10円

私たち首都圏のワーカーズ・コレクティブは、森林の間伐から加工まで一貫生産をする株式会社酒井産業と出会い、共同して日本の森林を守ろうと間伐材による割りばしの開発を行いました。

日本の国土の約70%は森林です。その森林は戦後植林された人工林が4割を占め、植林されてから60年から100年が経過し、現在全倒壊の危機を迎えています。森林は植林から伐採まで計画的に管理されることで健全に維持できます。しかし日本では廉価な輸入材を利用してきたため、森林が手入れをされず放置されてきました。このまま利用されず手入れもされないままだと、地滑りや土砂災害など深刻な事態を招く危険があります。間伐を行い、木を育て利用していくことが必要です。

環境保護をうたった「マイ箸運動」も盛んですが、日本の木は切らなければいけない時に来ています。国産間伐材を利用した割りばしを使って国内林業を元気にしましょう。割りばしは食のワーカーズが利用するほか、連合会や食ワーカーズで購入できます。

運営委員 浅草秀子



◆震災被災地支援金報告◆

会員ワーカーズに呼びかけた震災被災地カンパ活動では、5月末の第1次集約時に147万円が集まりました。WNJに集約し、支援先は生活クラブ連合会の被災生産者、被災単協などを中心に被災地支援を続けているいくつかの団体を検討します。



ワーカーズをもっと知りたい、
もっと広めたい。
そんな人たちのための冊子&出前講座

ワーカーズってなに？出前講座

講師派遣します
2時間 1万円 + 交通費
(関係団体は5千円)



「地域で暮らし続けるために 共に支える
ワーカーズコレクティブの福祉事業事例紹介」
WNJ発行500円

「ホップステップワーカーズ
起業のためのガイドブック」
改訂新版準備中！

WNJ: ワーカーズコレクティブネットワークジャパン(全国組織です)

あとがき 三芳町に住んで30年。近くの集会所に、男の料理教室・カラオケ・麻雀・映画会等いろんなサロンができてきました。高齢者に加え、定年退職された方が増えてきたからです。何が起きるかわからない世の中、地域で元気に暮らす。地域とふれあうには自分からいろいろな輪に仲間入りすることが大切だと思いますね。(さ)

ワーカーズ・コレクティブとは、経営と労働を自主管理・自主運営する主体的な働き方で、地域に開かれた労働の場を作り出すものです。

発行・・・埼玉ワーカーズコレクティブ連合会

1部 100円

発行責任者・・・後藤成美 編集・・・広報チーム 福島/齊藤 / 大塚

〒336-0031 さいたま市南区鹿手袋1-5-3 ひゅうまんポスト内 電話 048-844-0221 FAX048-838-7884

<http://saitama-workers.com/>